

BSIJ-CPD 認定記事 1単位

資格制度委員会委員長 加納恒也

日建設計コンストラクション・マネジメント㈱

もし、建築コスト管理士（コストマネジャー）が、 ドラッカーの「マネジメント」を読んだら

PCM版『もしドラ』 第5回

前回までの内容は、ホームページに掲載されています。

前回までのあらすじ

小林積算株式会社の課長である小林啓二は、社長から「コストマネジメント」「コンストラクション・マネジメント」という新しい分野への進出の可能性を検討するように命じられた。啓二は、早速若手社員の鮫島雄太とともに新しいミッションに挑むこととなった。そこで二人が手にしたのは、ドラッカーの「マネジメント」だった。

ドラッカーの「マネジメント」を参考に基本から様々な検討を進めていく二人の前に、突然現実のコストマネジメント業務の依頼が舞い込んできた。受託すべきか否か、検討の結果チャレンジすることに決定し、依頼主の大杉設計への業務提案を行った啓二たちに投げかけられた質問は、「御社には相当数の『建築コスト管理士』がおられるのでしょうか。」

SCENE17：

建築コスト管理士

「弊社における『建築コスト管理士』は2名です。今回統括責任者となります私山内と、コストマネジャーを務めます小林の2名です。」一瞬の沈黙の後、山内は覚悟を決めたように淡々と話はじめた。「弊社は数量積算を主な業務としてまいりましたため、コストマネジメント業務に対する備えが薄かったと反省しております。『建築コスト管理士』が取得できるレベルの社員も一定数おりますので、来年はぜひ多くのものが資格を取得して、御社のご期待に添いたいと考えています。」

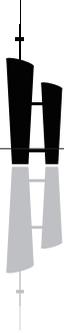
「わかりました。責任者のお二人が資格者であれば、私どもの考えていたスキームとも合致しますので、了解いたします。いずれにしろ、この資格はこれからの発展性が見込まれると思いますよ。実は私もぜひ取得したいと考えているのですよ。」桐山は

にこやかに締めくくった。「それでは次回の打ち合わせ日程を決めましょうか。」

SCENE18：

建築コスト管理士・・・その2

夕方会社へ戻った3人は、小林社長にその後の打ち合わせ報告を行った。建築コスト管理士資格の段になると、小林貞夫は大笑いした。「いや、これは経営者として私が先見の明を持たなかったということだね。この資格はいずれにしろ重要だとは思っていたのだが、なにせその位置づけもあいまいで、実力のほどもわからないところがあったからね。しばらくは様子見というつもりで、それほど関心を払っていなかったからね。」そこで一旦コーヒークップを手にとると、「最近資格の定義が明確になったし、企業訪問活動やガイドブック出版も積極的に進めているようだから、徐々にその効果が表れてきたよう

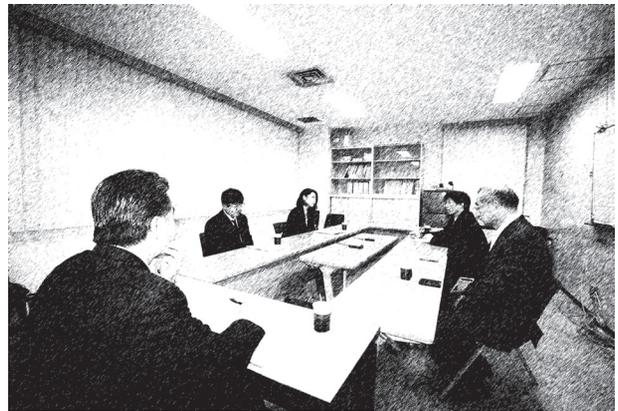


だね。ある超大手企業がコスト管理に関する業務を発注をしたときに、技術者の評価点に建築コスト管理士が入っていたという話も聞いているよ。」「特に毛呂さんは話術の達人だから、きっと桐山ワールドならぬ、毛呂ワールドの世界に引きずり込まれたのだろうね。」

積算協会副会長である毛呂陽一郎は、大手ゼネコンにおいて、建築系出身ながら積算からコンピュータ部門に移り、その後なぜか経理、財務、人事へ、挙句の果てに経営企画室長という異例のコースを歩んだマルチ人間である。役員候補と言われたが、どうもゼネコンの体質に合わないところがあったようで、定年前にさっさと退職した。現在は企業再生コンサルタントとして、“NPO法人中小企業のちから”の代表を務め、多くの中小企業・・・建設業に限らず・・・を苦境から再生へと導いてきた。自称“ブラックジャックのメス”という名も、その切れ味をみるとうなずけるところがある。なぜか最初に配属された積算部署が一番思い出深かったからなのか、積算協会には古くから会員や役員として関わっている。当然、小林貞夫とも長い付き合いがある。

切れ味鋭くこわもでの毛呂にも、やはりウイークポイントがある。なにしろ麻雀が大好きなのである。それも限られた種類の牌を集める“清一色”や“混一色”しか狙わない。他にどんな良い役ができそうになっても、決してそちらに走らない。したがって勝率は必然的に悪く、いわゆる“カモ”の部類に分類される。それも当然沢山ネギを背負っている。なぜ論理のかたまりのような毛呂が、このような誰にでもわかる負け方をするのかは、やはり闇に沈んだ都市伝説の一つであると噂される。ともあれ、協会の会議で言い負かされた連中は、早速麻雀でリベンジを図ろうとする。悠然と受けて立つ毛呂は、もはや人間離れした境地にあるのだろう。

「来年はぜひできる限り資格者を増やしましょう。」という山内の言葉にうなずいて、「ところで、計画に入っている人材の確保については、どのような予定になっているのかね。」と啓二に問いを發した。「明後日に曾田建設の森下さんを訪ねる予定です。OBの方をご紹介いただけないかと考えていま



す。」啓二の話に、「そうか、私も多少心当たりはないこともないが、まあ森下さんにお任せしよう。最も、森下さんご本人に来ていただければ最高だが、まあ無理な相談だね。」自身も曾田建設OBである小林社長は応じる。

SCENE19 :

人材スカウト

久しぶりに訪れた曾田建設の受付には、見知らぬ顔が並んでいる。訪問表に記入し終わった啓二を、「ご案内いたします。」と受付嬢が奥の応接室へといざなった。待つ間もなく、森下の丸い顔が扉から覗く。「やあ、久しぶりだな。改まって相談事だと言われると、なんか構えちゃうよな。」森下は相変わらずの口調でソファに腰を降ろす。啓二は「お忙しいところを申し訳ありません。」と型通りのあいさつをして、一呼吸おく。しばらくはゴルフの成績やら、知り合いの動向などのよもやま話が続き、「さて、そろそろ用件を聞こうか。」という森下の言葉で、啓二は本題に入っていく。

「実はこのたび、コストマネジメントを核として、コンストラクション・マネジメントの分野に進出いたします。といっても、部長もご存知のように、私の会社にそれだけ全部のスキルがあるわけではなく、まずどうやっても施工関係の部分が不足します。私自身幾分か経験させていただき、部長に鍛えていただきましたが、やはり経験不足です。」という切り出しで、守秘義務に違反しない程度に現況を語り、

「本当は40代後半から60歳前の方が欲しいところですが、とても無理だと思いますので、60歳過ぎで意欲のある方がいればご紹介いただけませんか。それなりの処遇は考えます。」と結んだ。「森下部長はその気がありませんよね。」と蛇足と思いつつ、つい付け加えた。

「そうか、確かに本格的にコストマネジメントやコンストラクション・マネジメントに携さわろうとすると、施工に関する知識は欠かせないところだな。ましてコストとなると、建設現場で発生するわけだから、そこを外せばただの数字ゲームみたいなものになりかねないよな。」森下もスカウトの事情は理解してくれたようだ。「特にマネジメントの分野でお役に立てるような人材となると、ゼネコンにもそれほど多くいるわけでもないと思うよ。いずれにしても幅広い経験と柔軟な思考力が必要だから。数日の時間をくれないか。」森下は頼もしそうに、にっこり笑いながら締めくくった。

SCENE20 :

マネジメント入門

翌日、啓二は鮫島を伴って夢設計に出かけた。もちろん財前一義に会うためである。コストマネジメントを成功させるためには、やはりコンストラクション・マネジメントをきちんと理解しておく必要がある。啓二はそのように結論付け、財前に教を乞いに訪問するのだ。

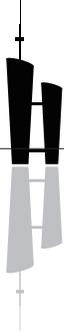
「やあ若手会以来だね。お仕事は忙しいの？」財前は相変わらず気さくな物言いで応接室のソファに腰を降ろす。「おや、これは本当の若手ですね。鮫島さんにもぜひ若手会に参加していただきたいですよ。」鮫島の「ご無沙汰していました。」という挨拶に応えながら、財前は陽気に話しかける。「何かCMについて勉強したいということだね。」啓二はここでも内容に注意しながら、コストマネジメントの仕事が間もなくスタートすること、コストとともにコンストラクション・マネジメントについても勉強する必要性を感じていることを話した。「当然御社と競合するところがあると思いますので、どこまで図々しくお願いしていいのかわからないのです

が。」と言いつつ啓二に、

「これは僕の持論なんだが、CMの世界もそれを担う企業が限られている。もっと優良なライバル企業が増えて、お互いが切磋琢磨して健全な競争を行えば、全体的にマーケットは広がっていくと信じているのだよ。一般の製造業の分野においては、またサービス業やコンピュータソフトの世界でも、そのような例が多く見られるよ。君たち積算事務所が一度むけてくれれば、まさに良きライバルとなるんだがね。」「ということで、聞きたいことは何でも教えてあげるよ。」と締めくくった財前は、



「実務的なものについては、また日を改めて打ち合わせしよう。ところで啓二さんは明日の16時から時間が空いていないかな。」と話題を変えてきた。「はい、明日は午後からは特に予定は入っていませんが。」啓二の答えに、「実はKM協会にガイカク委員会という集まりがあってね、出席者も多士済々で、CMに関するいろいろな話も飛び交うから、参加してみたらどうだろうか。明日16時から開始して、18時過ぎからは近くの蕎麦屋で一杯がフルコースなんだがね。君のところの山内さんも皆と知り合いでね、委員会への参加は時間がないと断られたけど、ゴルフは付き合ってくれているんだよ。」委員会への参加はともかくとして、一度経験してみたらどうかという財前の気遣いに、啓二は「よろしくお願いします。」と頭を下げた。



SCENE21 :

ガイカク委員会

日本建設マネジメント協会、通称KM協会は、わが国におけるコンストラクション・マネジメント(CM)の総本山である。設立は十数年前に遡るが、CM会社だけではなく、発注者、設計事務所、ゼネコン、専門工事会社やメーカーあるいは学識経験者といった幅広い分野の個人で構成されている。その成り立ちは、積算協会と似たところがある。会員ボランティアによる委員会活動が盛んであり、啓二が参加する予定の“ガイカク委員会”は、正式名称“外部連携拡大推進委員会”という長ったらしい名前を縮めたものである。最もこの略称では事業仕分けの対象となりやすい名前だと揶揄する声も聞かれる。

ガイカク委員会の委員長は、大手組織事務所六星設計のCM部長である金剛辰雄である。いかつい風貌と名前に似合わず、仕事では一度も部下を叱りつけたことがない、それでいて社内のチームでは規律ナンバーワンという統率力は、“私の金剛さん”というあだ名に神々しさまで添えている。

ところがこの物語に登場する人物のご多分に漏れず、読者の期待にたがわず、金剛にもひとつウイークポイントがある。ゴルフが大好きな金剛だが、ゴルフマナーにめちゃくちゃうるさい。ゴルフは紳士のスポーツであるとの固い信念のもと、ルール違反は論外だが、プレーの態度にとにかくうるさい。特にスロープレーは目の敵にする。まあ同年輩の連中は、それなりにうまく合わせてプレーするので、お互いストレスは余り感じないが、会社の若手社員は大変なことになる。もともと打球も定まらないことに加えて、打ったらすぐに走らないととにかく怒られる。「こらー全力疾走！」という声は、それでもマナーを意識して、大声にはならない。それにしても若手たちは必死に走る。とにかく“私の金剛さん”がこの時ばかりは鬼のようになる。日頃の優しさとのギャップは、若者の恐怖心を煽るのに十分な威力を発揮する。“大魔神降臨”に備えて、若手社員はコンペ一週間前から早朝ランニングの特訓を開始すると言われている。もっともマナーに厳しいことと、



本人のスコアが良いこととは無関係のようである。

以上のような、ガイカク委員会に関する基礎知識を財前から伝授され、「あとは行ってからの楽しみだね。」と委員会当日に至った次第である。

定刻10分前に会場に着く。金剛委員長の計らいで、いつも六星設計の会議室でガイカク委員会は開催されている。受付の女性は手慣れたもので、「あの一、ガイカク委員会で・・・」と言うや否や、「ご案内いたします。」と会議室へと通された。

財前はすでに到着していて、笑いながら隣の席を指し示す。室内にはすでに先客がもう1名いた。丸い黒縁の眼鏡をかけた丸顔の、50代半ばと思われる人は、立ち上がると名刺を差し出してきた。「和光設備の新川です。」あわてて名刺入れを手にした啓二は、“常務取締役、新川哲也”と書かれた名刺を見て自分の名刺を差し出した。財前がフォローしてくれる。「昨日速達メールでお知らせした小林さんです。CMを勉強したいとおっしゃるので、委員会にお誘いしました。まあ、この委員会で何を勉強するか楽しみですが。」二人は意味ありげに笑っている。時間が経つとともに委員の数は増えていく。金剛委員長は話聞いた通り、いかつい外見に似合わず、温厚な物腰で「初めまして、ようこそ。委員会が若返るのは楽しみです。」と手を差し出してきた。本当に仏さんのような雰囲気だけれど、大魔神に変身すると相当おっかないなと表情を外に出さないように啓二は金剛辰雄の手を握り返す。財前は横でにやにや笑っている。

オールバックに縁なし眼鏡の長身の人が見えた。高級なスーツを身に着け、すきのない身ごなしで席に着く。年齢は分かりにくいだが、やはり60代の初めであろうか。財前が啓二を紹介する。寺井さん、こちらは小林啓二さん、小林積算の課長さんです。小林さん、こちらは寺井明俊さん、総合外装システム工業の専務さんだよ。メールで存じ上げていますよと言いながら、「久しぶりに若い方が参加していただくとは、先が楽しみですな。この委員会は委員同士の交流が濃いですよ。」となにやら理系の言い回しで笑っている。後で聞いたところによると、寺井は風貌に似合わず、三流風俗が大好きで、伝統的なキャバクラから最近はやりのガールズバーまで、気ままに楽しんでいるようだ。最も年のせいか、健全な（相対的にだろうが）店を選んでいるようだ。付き合ったものも多いようだが、夜の帝王ならぬ夜の王子様といった可憐な雰囲気であるようだ。

そろそろ時間となって、一同席に着き金剛委員長が時計を見たタイミングを見図るように、ドアが開く。スキンヘッドに真っ黒い顎鬚、薄いブルーのサングラス風眼鏡をかけた長身の人が入ってきた。「ああ、天野さんぎりぎりセーフですな。」金剛が微笑みながら話しかける。天野はうなずくとそのまま椅子に腰かけた。天野については財前から事前に話を聞いている啓二であった。「君が一番必要な人物かもしれないよ。」天野清志は大手設計事務所系の太陽CMのマネジャーである。ゼネコンで積算・調達・工事・設計・営業と様々な現業を経験し、やがてCMの世界に入ったようだ。CM創世記には、某大手ゼネコンと単身デスマッチを繰り返したという伝説もある。もう70歳になるということで、会議では大抵居眠りをしている。自分では“眠清志郎”と称しているが、会社関係者の証言によると、“居眠り清じい”というのが正式名称だと言われている。席に着くと天野は早速居眠りを始めたようだ。

CMをどう外部にPRしていくか、委員がそれぞれ自説を展開していく。啓二は意見を言う素地もないから、黙って皆の意見を拝聴している。なかなか決定的なアイデアも出ないままに、時間は18時を回ろうとしていた。誰もが話し疲れ、一瞬の静寂が支配したその瞬間に、「あーあ」という間の抜けた声と

いうより音が聞こえた。音源を捜すと、天野がかすかに目を開けようとしている。これが昨日、財前に聞いた“必殺お目覚め殺法”か。天野は議論が伯仲し物事が決まらない時に、やおら居眠りから覚め、物事の核心を指し示すという“お目覚め殺法”伝説が伝えられている。伝説を伝え聞いている一同は、緊張の面持ちで“清じい”の言葉を待っている。

「皆さん、対外PRはいろいろありますが、この際直接発注者へとぶつかってみませんか。孫子に“急がば回れ”、また論語にも“子曰く百聞は一見にしかず”と述べられていますが、直接いろいろな発注者と意見交換することが近道だと思いますよ。特に一流企業トップ層へのアプローチをね。」“清じい”は、核心からちょいずれ感のあるいかがわしい出典のことわざを引用しつつ、皆の顔を見渡した。

天野の言葉をきっかけに、議論はまた次の局面に入ってしまった。天野は再び眠りの世界へと。

18時30分を回ったころ、金剛委員長が、「今日はそろそろ第一部を終了しましょう。」と宣言し、今回の日程を早々に決めると、一同は1階の蕎麦屋に足を向けることにした。もちろん天野は、いつ居眠りをしていたかと思うほど素早く、身支度を整えている

ということで、啓二のガイカク委員会第一回目は無事??に終了しそうだが。

次号に続く

この物語に登場する、団体・企業および個人は、全てフィクションです。